

# 震災遺児ら現地視察

## 気仙出身の2人も参加

陸前高田

震災で親を亡くしたり、児童養護施設に入所する全国各地の高校・大学生らが21日、陸前高田市を訪れ、まちの現状を視察した。この春、大学進学を控える大船渡市赤崎町の佐々木琉希さん(18)＝大船渡高出身

＝と、陸前高田市高田町の佐藤舞さん(名古屋市立大1年、19)＝同＝も参加し、「古里の復興に貢献したい」と志を新たにしたり。

一般財団法人・教育支援グローバル基金(東京都、橋本大二郎理事長)が主催。同基金が手がける返済不要の奨学金給付事業の支援を受ける大学生、高校生28人が参加した。

一行は戸羽太市長を表敬訪問したあと、高田一中クラウンドの仮設住宅、遺構として保存される計画の奇

跡の一本松や旧「道の駅高田松原(タピック45)」、旧気仙中を見学。タピック45では敷地内にある仮設追悼施設で一人ひとりの手を合わせ、犠牲者を悼んだ。

東北学院大教養学部に進む佐々木さんは、震災で父と祖父母を亡くした。悲しみは深かったが「残された自分のできることは精いっぱい生きること」と、高校3年間、大好きな野球と勉強に励んだ。

大学では防災などについて学ぶ。「ほかの被災地の実態もしっかり勉強し、知識を地元で生かしたい」と力強く語る。

一方、津波で高田町の自宅を失った佐藤さんは「市長から話を聞き、知らないことが多いと気付かされた」と振り返った。



旧タピック45駐車場の仮設追悼施設で手を合わせる佐々木さん(左)と佐藤さん(右)＝陸前高田

大船渡高2年時、同基金の人材育成事業「ビヨンドトゥモロー」に初めて参加し、震災の体験を語り、故郷への思いがさらに募った。将来の目標は看護師になること。「人口減少を食い止めるためにも陸前高田や大船渡で医療の充実

は不可欠。その力になりたい」と夢を掲げる。参加者は同日、宮城県気仙沼市、南三陸町を訪問。22日には仙台市で開かれるフォーラムで、被災地視察で学んだことや社会に対して自分が果たすべき役割について発表する。